
独りだけ楽しい？

紅月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独りだけ楽しい？

【Nコード】

N2431J

【作者名】

紅月夜

【あらすじ】

護廷隊十番隊隊長日番谷冬獅郎の隠れた特技とは？

元旦から仕事をしていた日番谷は、大きな霊圧が近づいてきているのに気づき、顔をあげた

「おゝい、冬獅郎」

タイミング良くドアを開け、入ってきた死神代行は両手に何かを持っていた

「“こままわし”しようぜ！あ、あけましておめでとう！！」

「普通順番、逆じゃねえか？」

「別にいいじゃねえか！

それより、“こままわし”しようぜ！」

やたらテンションの高い一護をよく見ると、頬は少し赤くなっており、喋るたびに口から独特な匂いが発せられていた

「お前、酔ってんのか？」

「酔ってねえよ！ちよつと親父に付き合っただけだぜ！！」

これぐらいと言いながら、明らかに一升瓶の大きさを示す一護

日番谷はため息をつき、斬魄刀をつかんだ

「霜天に座せ、氷輪丸」

数分後、唇が紫色になりかけている一護がいた

「酔いはさめたか？」

「さめた！

さめたけど、凍らす必要があったのか！？」

日番谷は暫く考え、一護を見た

「……そういえば、なかったな」

「冬獅郎、お前なあ……」

「酔ってたお前が悪い」

「いや、そうだけど……」

まあ、いいや、“こままわし”しようぜ」

日番谷は、来たときと同じことを言う一護を凝視して、斬魄刀に手をかけた

「黒崎、まだ酔ってんのか？」

「酔ってねえよ！」

うわ！氷輪丸を構えるなって！！危ねえだろうが！！」

日番谷が本気かどうかからない一護は、部屋の反対側に逃げた

「こまがあるし、お正月だから、“こままわし”しようって言っただけじゃねえか！！」

日番谷は刀を構えたまま、暫く動かなかった

「……冗談だ」

刀を収めながら日番谷の顔がいたずらっ子のようになり、少し口角を上げて口を開いた

「“こままわし”って言ったよな

ただまわすだけじゃ面白くねえから、ぶつけあいしようぜ」

「ぶつけあいって……べーごみたいなの？」

「そんなものだ

仕事も今すぐってのは無いし……よし、今から行くか」

「行くって何処に？」

「部屋の中でやるわけにはいかないだろ

流魂街のばあちゃんちだ」

本当は、仕事を終わらしてから行くつもりだったんだが、と言い、日番谷はすたすたと部屋から出ていった

「あ、おい、ちょっと待って、俺を置いてくな！」

一護は両手にこまを持ち、日番谷を追いかけた

「ばあちゃん、あけましておめでとうございます」

「はじめまして、黒崎一護です」

あけましておめでとうございます」

「はい、あけましておめでとうございます」

一護と日番谷は、潤林安にある日番谷の祖母宅に着き、挨拶をして
いた

挨拶が終わった後、一護は家から追い出され、中には日番谷とばあ
ちゃんが残っていた

「なあばあちゃん、昔、俺と雛森が遊んだこまって残ってるか？」

「ああ、あれかい
残ってるよ」

「ちよつとやりたいんだけど、何処にあるかわかるか？」

「ええつとー… 確かこの辺にいたと思うんだけど……………ああ、
あったあった
これだろう？」

ばあちゃんは、ごそごと押し入れの奥からこまを出してきた

「ああ、それだ

ありがとう、ばあちゃん」

「いやいや、これぐらい大丈夫だよ

あの男の子とやるのかい？」

「ああ

黒崎が持ってきたこまじゃ、面白く無さそうだからな」

「人に当たらないようにね」

「ああ、わかつてるよ、ばあちゃん」

日番谷は、終わったらまた来るから、と言いつつ、家を出ていった

「黒崎、待たせたな」

「おう、待ちくたびれたぜ……って、お前何だそれは！！！！」
日番谷が持つていたこまは、大きさが日番谷の顔ぐらいあった
「何って、こま」

「いやいや、こまって普通はそんな大きさじゃねえよ！！」

「そんな小さいこまをぶつけあったって面白く無いだろうが」
言いながら、一護の持つてきたこまを指す日番谷

「いや、だからって」

「こっちのほうが迫力があるぞ」

「いや、でも」

「相手のこまを弾きとばしたときの快感は、すごいぞ」

一護が尚も渋っていると言った日番谷が一言呟いた

「負けるのが怖いのか？」

「おゝし、やってやろうじゃねえか！！」

一護は腕捲りをして、日番谷からこまを奪った

三時間後、一護の雄叫びが響いていた

「なんで勝てないんだー！！！！」

こまをまわせるようになるのに一時間

こまを狙ったところに投げられるようになるのに、もう一時間
ぶつけあい始めてさらに一時間

一護は一回たりとも日番谷のこまを弾きとばせないでいた

「黒崎、お前弱すぎ」

「冬獅郎が強すぎるだけだって！！」

一護が日番谷からこまを聞き出そうとしていると、横から女の子の
声が聞こえてきた

「あれ、シロちゃん、何してるの？」

二人が見るとそこには、雛森桃がいた

「何って“こままわし”」

「ちょっと聞いてくれよ！冬獅郎にこまで勝てないんだよ！..」

「ああー... シロちゃんの特技だから」

「へ？“こままわし”が？」

「うん、そう」

私も勝ったことないもん」

雛森のその言葉に一護は暫く固まって動けなかった

「何だそれー！.....!!」

（後書き）

あけましておめでとうございます

最後意味不明とか言わないでください
思いついて、書き始めて一週間がたってしまいました
遅くなって、すいませんm（――）m

ここまで読んで頂き、ありがとうございます
感想等残して頂けると嬉しいです

では、今年もよろしく願います――（・――・）――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2431j/>

独りだけ楽しい？

2010年10月14日21時42分発行